

# お春

東京女子高等師範學校教授

岡田美津

## 二伯母の家

乗合馬車がゴロ／＼と煉瓦の家の横手の入口に着いた。幸兵衛爺さんは、お春を上等の婦人客にするやうに馬車から助け降ろした。お春は、淑やかに用心深く降りて、グタリとなつてゐる花束をおみね伯母さんに渡した。伯母は申譯ほどのキツスをお春に與へた。そして愛想もなく

「骨折つて、花なんぞ持つて來ないでもいゝに。時節が來ると、うちぢや庭中花になるんだよ」といつた。

およね伯母さんも、お春をキツスしてくれた。この伯母のキツスの方がおみね伯母さんのより少しは情がこもつてゐた。およね伯母さんは、

「幸兵衛さん、上り口のとこへ鞆たばんを入れておいて御くれ。午後二階おひるからへ上げるやうにするから。」と言つた。

「もしナンなら今二階へ上げてもえゝが。」

「なに、いゝよ。馬を打捨うつけつて置くいけなと不可い。いまに誰か通る、だらうから呼び止めて頼むよ。」

「ぢや、お春さん、さよなら。みねさん、よねさんも左様なら。その子は、賑やかな兒だよ！ 相手にするにや此上な  
しだ。」

おみね伯母さんは「賑やかな」といふ形容詞をきいて、身慄ひをした。この伯母は、昔氣質で「子供は止むを得ぬ時は、人前に出てよいが、聲などを人に聞かせるものでない」と信じてゐたので、

「喧しいのは困るよ。おみねも、私も」と卒氣なく言ひ放つた。

幸兵衛爺は、これや失敗たと思つたが、自分の考を先方に解るやうにすらくと説明する事なんかごく不得手なので、そのまゝ馬を馱して去つてしまつた。心の中では、あの面白いお春を「賑やかな」と言はないで、何とか、もつと穩やかな言ひ方があるかしらと考へて見た。

おみねは、

「さ、連れていつて御前の部室を見せて上げやう。その蚊除けの網戸は、あとをしつかり閉めておくのだよ。蠅や何か入らないやうに、まだ蠅の出る時節ぢやないが、始めからちやんとやりつけなといけない。風呂敷包を一所にもつて御いで。さうすればまた取りに降りて來ないでもいゝだらう。いつでも、よく考へて無駄足をしないやうにするのですよ。その敷物で靴を擦つて。こつちへ來ながら入口で帽子と外套を掛けて。」

「これ私の他所行の帽子なの。」とお春がいふと、

「ぢや、二階へ持つていつて押入に御入れ。乗合馬車で來るのに、一番いゝ帽子を被らなくてもよさうなものだね。」  
「だつて、之つきりきやないんですもの。平常用のはあんまりひどくて、持つて來られなかつたんです。あれは愛子がかぶるの。」

「その日傘は玄關の押入に入れてお置き。」

「あのう、私の部室に置いてもいいでせうか。その方が大丈夫らしいから。」

「この邊に盗賊なんか居ないよ。居たつて、御前の日傘をねらふものかね。ま、いゝから御出で。二階へはね、いつで

も裏階段から昇るのだよ。絨氈があるから表階段は使はないのだから。曲り角に氣を御付け。足を突掛けないやうに。右の方へ行つてそこだ。御入り。顔を洗つて髪を直したら階下へ御いでなさい。いまに鞆の荷を解いて上げる、そして夕飯までに片付けてしまはう。……御前の着物は後前になつてるのぢやないかへ。」

お春は願を下へやつて、薄べらな自分の胸の中央に、縦に行列してゐるボタンを眺めた。

「後前だつて？ あゝ！ この事なの。いゝえ、これでいゝの。子供が七人もあると、一々着物のボタンをはめたり外したりしてやつて居られないのよ。……みんな銘々にさせなくてはね。だから宅では、みんな前ボタンなの。みいちゃんなんか、やつと三歳だけれど、やつぱり着物は前ボタンなの」

おみねは、何とも答へずに戸を閉めて去つたが、その顔には言語以上の意味が現はれてゐた。

お春は、部室の真中におつ立つて見渡した。一つくゞの道具の前には眞四角な油布が敷いてあつて、ベッドの前には、絨氈が敷いてあつた。その「ベッド」にはへり取りの白い「デミチ」地の敷布が掛けてあつた。

何もかもがあくまで清楚してゐた。天井は、お春には珍らしい程高かつた。北側の室で、細長い窓から臺所や、納屋などの方を眺めるやうになつてゐた。

お春は、日傘を室の隅に立てかけ、他所行の帽子を、もぎり取るやうに脱いで、鏡臺の上に投り出し、ベッドの真中へそゝくさともぐり込んで、敷布を頭から被てしまつた。こんな眞似をしたのは、その室が厭なからではなかつた……この部室は實家のお春の室よりも餘程いゝ室だつたのだから。さうかといつて、景色がわるいからでもなく、長い旅をしたからでもなかつた……お春は疲れたとも、何とも思つてゐなかつたのだから。ではといつて、見知らぬ處だからでもなかつた……此兒は、變つた處が好きで、變つた氣分を味ふのを好んでゐたから。實はこんな眞似をしたのは、自分にも譯の分らない感情がさまざま入り混つて起つて來たからなのであつた。

やがて、部室の戸が靜に開いた。この河崎村では、戸を敲いて案内を乞ふなどの上品な事を決してしなかつた。よしや、したとしても、子供に對してまですることはなかつた。

おみねが入つて來たのであつた。彼女は部室に人の居らぬのでキョロ／＼見廻はしてゐたが、敷布が白く波を打つて、海のやうに高く低く搖れ動いてゐるのに氣が付いた。

「お春！」

その一言の中に屋根の上から機音聲に呼ばはつた程の力が籠もつてゐた。

黒い、もしやくの頭と、二つの怖へたやうな眼が白い敷布の外へ現はれた。

「晝間から何だつて、床の中へ入つて、綿をくしやく／＼にしたり、埃だらけの靴で、枕を汚したりしてゐるのさ。」  
お春は、申譯がなさ／＼に起き出した。何とも言譯の語はなかつた。辯解の途も託言も叶はない程の大罪だつた。

「伯母さん、御免なさい。……私どうかしたのよ。自分にも解らないの。」

「フン、またぢきにそんな氣になるなら、伯母さんの方にも考があるよ。さすぐその床を皺を伸して平におし。今、お前の袍をこゝへ持つて來て貰ふのだから。他にこんな散亂かつた室を見られたら困る。村中に觸れちらかされるもの。」

### 三 お春の手紙

母さん、私無事に着きました。着物は、さう、くしやく／＼になりませんでした。そして、およね伯母さんが、手傳つて押しをして下さつたの。私、幸兵衛爺さん大好き。煙草をしやぶつたりするけれど、新聞を戸口へ上手に投入れるのよ。私、暫くの間、馬車の外に乗つてゐましたが、御みね伯母さんの家に来る前に、中へ入つたんです。入りたくなかつたけれど、母さんは、私にさうさせたいだらうと思つたから、御みね伯母さんと、一々書くのは長いから、これからの手紙に

は、「み」と「よ」と書きまますよ。「よ」さんが字引を下すつてね、六つかしい字を御引きつて。随分時間がかゝるのよ。口で話す時には字なんかを考へないでもいゝから、嬉しいわ。書くより話す方がぐつと落(らく)で、そして、面白いわ。」

この煉瓦の家は、母さんの御話なすつた通りで、ちつとも變はつてゐませんよ。御客間は立派ね。中を覗くと身體がゾク／＼慄へるようよ。飾つてある道具も立葉ね。どの室も氣樂に座れさうな場所がなくて、……まあ臺所だけ位。昔の猫が居ますよ。でも、こゝの家では子猫が生れても、生かして置かないんです。親猫はもう年寄りで、ぢやれたりしませんよ。うちの花姉さんが、母さんは、父さんと一所にこゝの家から逃げたんだけ私に話しましたが、こゝを逃げ出したら、さぞよからうと私にも思はれるわ。もし「み」さんが逃げたら、私「よ」と二人でこゝに居たいと思ひます。「よ」さんは「み」さんほど私を嫌がらないから、政次に私の繪具箱をやつて下さい。たゞ、若しか私が歸宅つた時の用心に、赤色だけ使はずに置いてくれつて言つて頂戴。

花姉さんと太助たあそんとは、私の役だつた仕事までして、いやにならないでせうかね。

春 子

『母さん、今朝は私悲しさが身に染み渡つてゐます。之は「醫師の妻」の中にある文句よ。その妻の姑が意地悪で、御嫁さんに無情なのが、丁度「み」さんが私にするやうなの。花姉さんが、こゝの家へ來ればよかつたと思ふの。伯母さんは、花姉さんを招まねびたかつたんですし、姉さんは私よりも善い人で、口返くもへん答こたへなんかあんまりしませんもの。

私の薄黄色キヤラクの切れ橋があつて？「よ」さんが私の着物の背中に飾りボタンを付けるのですつて。このまゝではあんまり見ともないのでせう。この河崎村の人の風フカイはなかく、洒落スエカれてゐるの。教會に來る人達のなんか畑ヶ谷のよりも立葉ですよ。

學校もまあ面白いわ。こゝの先生の方が畑ヶ谷の先生より餘計何か知つてゐます。けれど私の問を全部ぜんぶ答へてはくれな

いの。私は大抵の女生徒よりもよく出来ます。唯一人私の及ばない女生の兒が居ます。男生徒の方の二人には私、とても及ばない。そのよく出来る、金子しまつていふ兒は、頭の中で否妻みたやうに加へ算や引き算をしてね、どんな字でも正しく書けるけれど、何にも頭に考がないの。讀本の三をしてゐます、でも、本の中の話なんか嫌なの。私は、讀本の六をしてゐるけれど、掛け算の九々が出来ないもんだから、下山のちいさな双生兒のゐる組に落とすつて、寺岡先生が嚇かすんです。

私、毎日午後に縞木綿の着物を縫つてゐます。金子しまさんだの下山の家の子達は、御母さん達に知れない時は、河のところで飯事をしたり、驅けたりしてゐるのにお母さん達は、水に落ちるといけないつて心配するんです。「み」さんは私が着物を濡らすだらうつて心配して、やつぱり私に行かせないの。四時半から晩の御飯までと、晩御飯後少しと、土曜日の午後だけ、私遊べるの。

こゝの家の牛に一匹子供が生まれました。斑のあるのが、今年は、林檎と枯草が出来が宜いんですね。母さんと太助は悦んでゐるでせう。……抵當の方へ餘計拂へるから、寺岡先生が何のために學門をするのですかつて御尋うになつたから、私の目的は抵當をはやく片を付ける爲ですつて言つたの。したら、先生がそれを「み」さんに話したもんだから、罰だつて餘計に御裁縫をさせられたのです。伯母さんは、抵當なんていふ事は、泥棒をしたり、疱瘡に罹る位耻かしい事だつて、そしてうちの地所が抵當になつてゐるつていふ事が村中に擴まるつて言ふのよ。金子しまさんだつて、賀田林三さんだつて、抵當はないの。下山の家はあるの。

春 子

『太ちゃん、いつか御前と私と犬を納屋に括りつけたら、繩に噛みついて吠えたわね。私、丁度あの犬みたやうよ。たゞ納屋でなくつて煉瓦の家なだけ。それに「み」さんに噛みつくわけには行かないわ。私感謝しなくてはならないし、學門をして私がおのものになつて、御前に加勢して抵當の片を付けなくつちやならないから。』

はあちゃんより

#### 四 學 校

お春は金曜日<sup>に</sup>到着したのでその次の月曜日<sup>から</sup>、七八町離れた元河崎の小学校へ通ふことになった。御みね伯母さんが、隣家<sup>となり</sup>から、馬と荷馬車を借りて、お春を學校まで乗せて行き、寺岡といふ女の先生に面會して、教科書を揃へたり、何かして、お春を、學問の途に出で立たせやつた。序に話すが、寺岡さんは先生になる修業をした人でなかつた。教へるのは、あの人の生れ付きだ、とその家族<sup>かぞゑもの</sup>は言つてゐた。そんな位だから、兒童<sup>こども</sup>の腦力<sup>のうりき</sup>だの、周圍<sup>あたり</sup>の狀況<sup>じやうきやう</sup>などに、御構ひなく、この先生は、誰も彼もを、たゞ一様に教へてゐた。丁度、ある博物學者の語に、海猫がカナダの湖水に居ると同じに心得て、ロンドンの三階の室で、堤をせつせと築いたとあるやうに、寺岡さんも、自分のやつて居る事は、兒童の頭に、智識の土臺を築いてゐるのだと思つて教へてゐた。

お春は、二日目から歩いて學校へ通つた。これは、一日のうちの樂しみの仕事だつた。天氣が良くて、露<sup>つゆ</sup>があまり甚く置いてない時は、林の中の近道を行くのだつた。大通りから横<sup>よこ</sup>に外れて、森田の家の柵<sup>さく</sup>をくゞり抜け、賀田の家の手を追ひ拂ひ、牧場の、咲いてゐる花の中に踏み堅められてゐる小道を傳はつて行つた。それから岡を一つ降りて、小川を、石から石へと跳んで渡つて、日向で眠さうに眼をパチ／＼させてゐる蛙を吃驚<sup>おどろ</sup>りさせたりした。その先が樂しみな林なので、迂<sup>まが</sup>る足の下には、褐色の松葉が一面、落ち敷いてあり、枯樹の切株のぐるりに、紅い黄いろい茸<sup>こけ</sup>が、一晚の中に、によきりと出てゐたり、蟻<sup>あひ</sup>のやうなバイブ苔<sup>こけ</sup>が、危なく、踏みにじつてしまひさうなところに、不意に見付かつたりするのであつた。それから踏段<sup>ふみい</sup>を越して、草原を抜けて、又柵をくゞつて、大通りへ出ると、三四町の得<sup>とく</sup>になるのだつた。

「こゝを行く時のお春の嬉しさといつたらなかつた。文法の本と、算術の本を抱<sup>かか</sup>へて、今日習ふところはよく豫習<sup>よこ</sup>であるなと思つて歩いた。御辨當箱<sup>おんべんとうばこ</sup>を右の手にぶら下けて中に入つてゐるバタと蜜の塗つてあるバン、ドウナツ、生薑<sup>しょうが</sup>入りの御

菓子を嬉しいと思つて彼女は歩いた。時には、その週の金曜の午後、暗誦する筈の詩を、聲を出していつて見た。

武士は、アルジエの原に死なんとす。

看護の婦人のかけもなく、

涙を漲ぐ女もなく。

こ吟じて見て、お春は、その句調を、その感じを賞でた。も一つこの兒の好きな詩は、

樵夫よその樹を赦るせ。

枝一つにも手をな掛けそ。

若かりし時

その樹蔭我を庇へり。

今ぞ我、彼を護らむ。

であつた。

金子の御しまが、お春と一所に近道をしてゆく時には、二人で、この詩を身振り入りでやるのだつた。おしまは、いつでも樵夫になつたが……只斧を空に上げる振りさへすればよかつたから。一度、おしまはその情的な、樹の命乞をする人の役をした事があつたが、あんまり馬鹿々々しくつて演つてゐる内になつたといつて、二度とその役にならうとしなかつた。お春は内心之を悦んだ……立役をしたいと思ふこの兒には、樵夫の役は、あまりに平凡だつたから。お春は、詩人の熱烈な哀願の句に心酔して、樵夫さんに「なるだけ斧を取つて冷刻に振舞つて頂戴。そうすると私が、一層情を籠めて哀願の句を述べるやうになるから」と言つた。ある朝など、お春は、平常よりも氣まぐれな心を起こして、樵夫の前に膝まづいて、その裾に縋つて泣いた。併し、さすがに之はあまり極端だと思つて、すぐ止めてしまつた。



「これはいけない。馬鹿氣てゐるわ。でも、この身振はね……あのう、「三粒の米を我に賜へ」の詩には、當てはまるでせう。あなたが御母さんで、私が餓死にしかけてゐる子供になるわ。……まあ、さ、その釜を御捨てなさいよ。もうあなたは樵夫きさふでないんだから？」

「ぢや、私、手を如何して居たらいいの」とおしまが訊ねた。

「如何でも好きなやうになさいよ。」と、お春は面倒くさうに言つて「あなたはお母さんなのよ……それだけでいいの、一體あなたのうちの御母さんは手を如何なにしてゐて？ さ、しませう。」

母さんお米を三粒下さい。

唯三粒だけ、どうぞ！

すると、私の命の糸が

あす  
明日の朝まで續きます。

學校は岡の上に立つてゐた。そして屋根に旗竿があつて、正面に、男生と女生との別々の入口があつた。右手には、野や草地が高く低く續き、左手には、松林があり、遠くに、河が光つてゐた。室内には、これといふ目を惹くものは何も無かつた。教壇の片隅に、教師の机と椅子があり、あとは、無格好のストープに、地圖が一つ、黒板が二つ、隅の棚に、水桶と長柄の柄杓ひょうしやく、それに、生徒用の机と腰掛が二十ばかり。その腰掛は室の後部にあるのが背が高く、上級の足の長い生徒が之を占めることになつてゐた。窓に近くて先生に遠いので、一同がそこへ行きたがつた。

級が別けてあつたのだが、さればといつて、誰一人他のものと、同じ本を習つてゐるものもなく、何學課でも、同じ程度に進んでゐるものは居なかつた。ことにお春と來ては、どの級に入れていゝか分らないので、寺岡先生は、半月經つてから、どこへも入れぬ事にしてしまつた。それで、讀本の時は、お春は、中學へ入る準備をしてゐる賀田林三と、金子精

一と一所にやり、算術の時は、下山の舌たらずの鈴ちやんと習ひ、地理は、金子おしまと一所で、文法は放課後に一人で先生から教はつた。いろいろな奇抜な考は腦裡（ねんざい）に一杯ありながら、字を正しく書くのに骨が折れるので、お春は、自由に思想を現はせなくて難儀をしてゐた。

歴史はお春のお得意で、あまりどしどし進んだ爲、此上は、下山の一番上の男兒の級に入ることになりさうなので、彼女は急に、歩を緩めてしまつた。どうも、下山シーソー君と連れ立つて智識の途をゆくのは楽しくもなく平穩でもなかつたから。下山三太は、始終グラ／＼して物を決定しない性なので、シーソー君と仇名がついてゐた。實際の事實でも、日取りでも、水泳でも、魚釣りでも、本を借りるのでも、一文菓子店で、菓子を買ふのでも、かうと決定（きま）するすぐあとから、まるきり反対の方に變るのだつた。シーソー君は、顔色のわるい猫背の子で、氣が揉める時には吃る癖があつた。かうした弱點がある爲に、シーソー君は、お春のきび／＼した氣性にすつかり引付けられてしまつて、お春がいくら手厳しく彼をやつつけても、お春から眼を他へ向けかねてゐた。お春が靴の紐が解けたのを結ぶそのやりかたの威勢のよさ、ものに夢中になつた時、黒い御下袴を肩の邊りで揺ぶる工合、机に本をのせ、腕を拱んで、正面の壁を見据えて暗記してゐる姿勢、どれもこれもが、シーソー君の心を恍惚（うろたへ）させるものであつた。先生の許を得て、お春が隅の水桶の處へいつて、柄杓から一杯飲んで來ると、シーソー君は、何としても、立つていつて一と飲せずには居られなかつた。お春の次に水を飲むといふ點に一種の親しさがあるばかりか、途中でお春に行會つて、あのすばらしい眼で、冷やかに見下（みくだ）されるのが、慄へるほど嬉しかつたのである。

夏のある暑い日に、お春は、もう度外れに、のどが渴いた。水を飲まして下さいと三度目に先生に乞ふた時、先生はよろしいと言つたものゝ、お春が教師机の近くに來た時には、先生は不機嫌らしく肩を上げた。お春が柄杓を放すと、シーソーがすぐ手を舉げた。先生は、うるさげに許可を與へた。

「春さん、あなた如何したのですか」と先生がいふと。

「今朝の御飯に鹽鯖をたべたんです」とお春が答へた。この答は、事實を述べただけで、何も可笑しい事は無かつたのだが、室中の子供が笑ひ出してしまつた。

寺岡先生は、自分の言つたのでなく又自分に解らぬ滑稽は厭だつたので、顔を赤くして、

「春さん、五分間その桶のところに立つてゐらつしやい。すこしは、のどの渴きを我慢するやうになるかもしれない。」

お春は、胸がどき／＼した。水桶の脇に立つて、學校中のものに見られてゐる！ 思はず、不服の態度になつて、自分の席の方へ一歩進みかけた。すると、先生がもう一層きつい聲で命じたので、お春は踏止まつた。

「桶のところに立つてゐるのです！ 三太さん、あなた、今日は何度水を飲みたいと言ひましたか」

「これで、四……四度目」

「もう柄杓を持つのではありません！ 今日には學校中の人が水ばかり飲んで、何もしません。勉強の時間がまるでないので。三太さんも、鹽鯖をたべたのですか」と寺岡先生は皮肉に尋ねた。

「お……お春さんみたやうに、ほ……ほくも……さ……さばを食べたんです」〔全校擧つてクス／＼笑ひに陥つた〕

「さうだらうと思ひました。三太さん、桶の向側へいつて立つてゐらつしやい。」

お春は、耻かしさと、腹立たしさで頂垂れてゐた。人生が堪へられぬ程暗黒になつた。罰せられるのさへ厭なのに、下山シーソーと並んで罰を受けるのは、人間として忍びうるものでなかつた。

午後、唱歌が最後の課業だつた。鳥飼きよが「我等河邊に集はん」を選んだ。今日の出来事に、何とやら關係のありけな題と見え、生徒等は、

我ら集はん

美しき河邊に。

といふ文句を、殊更強く勢込んで歌つた。

寺岡先生は、お春のうつむいでゐる顔をちらと視て心配になつて來た。お春の兩方の頬が眞紅になつて、あとは眞蒼な色をしてゐた。そして涙が睫毛に宿り、息遣ひがせわしく、ハンケチをつかんでゐる手が、木の葉のやうに震へてゐた。

初の歌が終つてから、先生は、

「春さん。席に歸つてよろしい。三太さんは、課業がすむまでそこに居るのです！ 皆さんに言つて置きますが、先生が春さんに、桶のわきに立つて居るやうにと言つたのは、水ばかり飲みたがる癖を直すためなのです。學課に身を入れないで、室の中をあちこちと歩きたいから水々つていふのです。今日、春さんが水を飲まして下さいといふたんびに、皆が、あとからあとから飲みに行きました。春さんは、ほんとに、のどが渴いてゐたんだから、ほんとに、眞似をした皆さんを罰する筈でしたらう。……こんどは何を歌ひますか。」

「古釣瓶」

「もう少し水に縁のないものを御考へなさい。「御國の民」でも何でも。」

お春は、席に歸つて、唱歌集を出した。寺岡先生の全校への説明で、心の重荷が少し他へ移つたので、他に顔が合はされぬ程でもないと思つた。

唱歌といふ窮屈でない課業を幸ひ、諸方から同情の意味の御遺物が、お春の許へ届いた。金子精一は、黒板へ地圖をかきにくく途中、お春の席を通つて、楓糖を一片落としていつた。烏飼きよは、ごく新しい石筆を、足で轉がして、お春のとこへよこしてくれた。隣席の金子しまは、紙を丸めた球を山と積んで「〇〇射撃に用ふる彈丸」と書いて見せた。

お春の生活に光明が射して來た。文法を習ふので先生と二人限りになつた時には、お春はもう平氣になつてゐた。歸つ

て行く最後の兒童の足音も廊下に消え、シーソーが詫びたさうに後を見返つてゐるのを、お春は、冷やかに悔蔑の眼で見返してやつた。

寺岡先生は、やつと十八歳なので、田舎の小學校を教へてゐるうちに、お春のやうな兒に出遇つた事がなかつた。

「春さん、先生は、あなたを罰しすぎたやうな氣がする」と言つた。

「先生、私は今日一つも答をまちがへなかつたし、他と話しもしなかつたんです。私、水を飲んだだけで、あんな耻かしい目に遇はないでもいゝと思ふ」と

お春は、聲を慄はせた。

「あなたがやり出して、他を誘つたのです。……とにかくさうらしかつたのです、あなたにする事を……たとへば、笑つても、内所の手紙を書いて、室外へ行つても、水を飲んでも一同がするから、さういふ事は禁じなければならぬでせう。」

「下山の三太が人真似をするんです」とお春は腹立たしげに言つた。「私、獨りで隅に立つて居るのは構はないけれど……さういやではないけれど……あの人と一所はたまらないんです。」

「先生にも、それが解つたから、席に歸つていゝと言つて、三太だけ残して置いたでせう。あなたは他所から來た人で、皆が目につけるから、氣を付けなくてははいけません。……さ、動詞の變化をやりませう。「ある」の動詞、過去完全、可能法の形は？」

我は何々だつたかもしれぬ

汝は何々だつた……………

彼は……………

「例を舉げて」

我は悦んだかもしれぬ

汝は………

彼、彼女、それは悦んだかもしれぬ

「彼」だの「彼女」は悦んだかもしれないが、「それ」といふものは悦びうるでせうか」と寺岡先生は細かい意味をほじくるのが好きなのでかう言つて尋ねた。

「えゝ、出来ませう。」

「だつて「それ」は中性ですよ。」

お春は、しばらく考へてゐるたが、

「先生、花葵あふひは、中性ですか。」

「そうですね。」

「ぢや『花葵は、雨を見て悦んだかもしれないが、小さな弱い蕾が一つあつたので、それが雨に打たれるかと心配で心から悦ばなかつた。』といはれるでせう」

寺岡さんは困つた顔をして、

「花葵は、ほんとは、悦んだり心配したり出来る筈はないのですよ。」

「どうですかね……次は何」

「「知る」の假定法過去完了」

もし我あの時知つてゐたら

もし汝……………

もし彼……………

まあ、一番悲しい「時」ですね。もしもくくつてね。知つてさへるたら、どうか都合よくなつたらうにと思ひますよ」

寺岡さんは、そんな風に思つた事はなかつたが言はれて見れば、假定法は、悲しい「法」で、「もしも」といふ語は、なさけない語だと思つた。

「今のゝ例を舉げて御覽なさい。それで今日は御仕舞にしませう。」

「もし私が鯖が好きでなかつたら、のどが渴かなかつたでせうに」

と、お春は華やかに笑つて文法の本を閉ぢた。

「もしあなたが、眞に私を愛したのだつたら、私を立たせはしなかつたでせうに。もし三太が悪戯わるわざを好きでなかつたら、水桶のところへ私の後をついて來なかつたでせうに。」

「それから、もしお春が學校の規則を尊んだのだつたら、のどの渴くのを我慢したでせうに」と先生が言つた。そして二人は仲よくなつて別れた。(以下次號)